

これからの子供たちに必要なのは 「和」のこころと文化、そして思いやり

新宿せいが保育園（東京・新宿区下落合）

「新宿せいが保育園」は園長である藤森氏が「世界に向けて日本の質の高い保育を発信したい」という気持ちを込め、同氏が理想とする児童教育のポリシーを具体化させた保育園として平成19年に誕生した。

同園の特色である「見守る保育」と、それを実践するための施設づくりの考え方について伺ってみた。



いま、子供たちに必要なことは人を思いやる心

保育園は働くお母さんが子供を昼間預けるための施設でなく、将来子供たちが成長する上で必要とされる「人を思いやる心、助ける心、協調性」などを早いうちから自然と身につけさせる役割を担っていると思います。

兄や姉が弟や妹の世話をしたり、祖父母や近所の人が面倒みる機会が減り、「周囲の人との接点」が極端に減ったことで、わがままや他人の痛みがわからない子供が増えてしまいました。

幼少期に多くの「他人」と接する集団生活というものはその後の子供たちの成長に大きな影響を及ぼすものであると考えています。

我々人類の祖先であるホモサピエンスが生き残れたのは、「協力」「助けよう」「分かち合いたい」という能力を獲得してきたからです。

いま、子供たちを取り巻く環境は昔とくらべて変わってきています。

そのような感情を小さいうちから園でのくらしの中で自然と身につけ育む「見守る保育」を行っていることが当園の大きな特長です。



園長 藤森 平司氏

保育園の「空間」が果たす役割

～日本文化から発信する5Mの教育

現在保育園が不足しているという声を多く聞きますが、私はただ施設を作れば良いというのではなくそこで長時間子どもたちが過ごすために最適な「環境」を提供してあげることが大切だと思っています。

幼少期に経験する「色」「空間」という環境は非常に重要です。保育園を開園するにあたり保育先進国である欧米の施設の見学を踏まえ、日本が持つ「和のこころ」を子供たちに伝えていけるか、という点を念頭に施設計画を進めてきました。

当園では「5M」という教育スローガンを掲げています。まず一つ目は先ほど申し上げた「見守る保育」です。続いて「もったいない」「むずび（むずびつける）」「もてなし」「めりはり」それぞれ5つの頭文字からとりました。特に「めりはり」については、「陰と陽」「動と静」「ハレとケ」という日本伝統の世界観を子供たちが日々の生活の中で感じとり、身につけてもらえるよう空間演出～内装や家具、植栽などの配置・配色や照明の調節などを行うよう心がけています。

子供たちのすこやかな成長を願うと同時に、近年忘れられている「和のこころ」を自然と身につけ、心豊かな大人に成長していくためのお手伝いをしていくことが、我々の使命であると思っています。



年中児童保育室

天然素材のリノリウムを選択した理由

教育現場における「色」「視覚」の効果は子供の成長に重要な要素です。色彩をシーンに応じて自由に選べるところもリノリウムが持つ良さであると思います。抗菌性にも優れている点も衛生管理上最適な素材であると言えます。かつてインフルエンザが大流行した時期がありましたが、直接要因であるか検証はしていませんが、当園の発症率は他園とくらべて少なく抑えられました。

リノリウムは冷たくない!?

リノリウムは一見冷たそうな印象がありますが自然素材の持つ暖かみがあります。また、コンクリートの躯体にダイレクトにリノリウムを貼っただけだと「木材より硬くて危険なのではないか?」という懸念も言われますが、実際には木材より転倒時の衝撃吸収性は優れていると感じます。

スタッフからも清掃しやすいという声を聞きますが、保育園につきものの汚物や吐しゃ物等の清掃も簡単に行え、さらに深い傷や落とせない汚れが付着した場合でも容易に貼り替えが可能である点も良いと思います。

かつての日本家屋を構成する各部材となる材木、障子や襖、畳などのライフサイクルは、それらの原料となる植物が育つ期間とほぼ一致していたのです。

当園の床材を選ぶ過程で設計士から提案されたリノリウムは1年草である亜麻の種から採油されるアマニ油などが主原料。「和のこころ」を伝えたいという私の考えにマッチしたものでした。



年中児童保育室



エントランス



年長児童保育室